

『放課後ゴルフ倶楽部』

上杉隆 著 ゴルフダイジェスト社 1,260 円 (税込)

学業より恋愛より ゴルフに生きた青春物語

会員 高橋 辰三 (62 期)



ジャーナリストとして有名な著者がジャーナリストである前に、実はその本業がゴルファーであることは意外と知られていない。

酒やギャンブルと違って、ゴルフが人生を狂わすなんてあるわけない、と私は思っていた。ゴルフは少々お金がかかるものの、ただかスポーツにすぎないし、健康的だし爽やかで悪いところなんてないと思っていた。ゴルフを始めるまでは。

私は、20年以上もプロゴルフ中継を観ていて、つい最近やっとゴルフを始めたのだが、私自身もゴルフの虜になってしまった。これほどまでに人を狂わせるゴルフの魔力とはいったい何なのだろうか。

この本は、著者の中学生時代を描いた、学業より恋愛よりゴルフに生きた青春物語だ。この本に出てくる著者の同級生たちは、中学時代、明けても暮れてもゴルフのことを考えていた。街中で、公園で、工事現場で、どんな環境でもゴルフをしてしまう。少年たちは、ゴルフへの情熱のために、学校を遅刻あるいはさぼり、時に年齢を詐称し、また時にはゴルフ料金を支払っているかのように装い、あるいは夜間ゴルフ場に不法侵入をし、それに飽き足らず大都会の真ん中でラウンドするなど、多感な青春時代に非行、いや数々の軽(?)犯罪をするまでになってしまった。この少年ゴルファーたちはまさにアウトローだけれど、ゴルフのルール、マナーは案外守っていたりするのが微笑ましい。

とは言いながらも、著者は、仲間たち一同、本当の非行に走らず、現在立派な大人に成長したのは、ゴルフのおかげに他ならない、と青春時代を振り返ってい

る。この本の主人公である著者は、中学・高校時代、伝説のプロゴルファー、セベ・バレステロスをヒーローとして神格化し、憧れていた。おそらく著者のゴルフ生涯にとって、セベはいつまでも英雄であり続ける。私にとってそれが小さいころに観ていたノーマンなのか、はたまたウッズなのか、それは分からない。

セベも例外ではないが、長いゴルファー人生のすべてのキャリアを通じて素晴らしい成績を残し続ける人はほとんどいない。昨年、セベが若くして他界したのは記憶に新しいが、それでも、私たちの記憶に残っているのは、晩年決して順調ではなかったゴルファーではなく、ギャラリーを沸かせた数々のスーパーショットを放つ貴公子だった。我々が他人の記憶に残るゴルフをしたいなんて考えるのはおこがましい考えかもしれないけれども、私はこの本を読んでから、できれば人の記憶、それも良い記憶に残るプレーをしたいと考えるようになった。この本の著者は、20年以上前の友人たちのストロークから打球、そしてコースのシチュエーションの全てが鮮明に記憶に残っているようだ。ゴルファーは意外と他人のプレーも覚えているようなので、みっともないプレーはしないよう気をつけたい。

この本は多くのことを教えてくれた。最も重要なのは、ゴルフで友情は育つけれども、ゴルフに狂ってしまつては、恋人もできないし、パートナーとの関係が悪化するかもしれないということ。デートより何よりゴルフが楽しくて仕方がない私にとって、ゴルフとの付き合い方はいつまでも難問であり続けるような気がしている。